

言語認識に関する一考察

湊 吉 正

1. 言語認識と言語記号の浸透性・機能的媒介性

筆者はかつて、全国大学国語教育学会編著『国語科教育学研究』（学芸図書、昭和50年4月）における「第七章 言語要素の学習指導」中の「七 言語環境・言語感覚・言語認識」の部分を担当執筆させていただいたが、そこで「言語認識」については、次のように記述している。

人間の生活場面における言語の一次的機能の一つとして、認識の機能が挙げられる。われわれの属する生活世界のさまざまなことがらを、われわれは主として言語の意味形式を通じて把握していく。このような言語によることがらの把握作用を、まず言語認識として規定することができよう。

以上のような言語認識の意味の側面を言語認識Aとするならば、これに対して、そのような機能をもつ言語そのものに対する把握作用をも、言語認識の意味のもう一つ別の側面として規定する必要が生じてくる。そのような側面を言語認識Bとしてみよう。

そこで、言語認識Aと言語認識Bとの段階的統合によって、真の意味で言語認識のすべてが獲得されることになる。このような言語認識の把握の上に乗って、初めて言語機能の力動的実態が視界にはいってくるであろう。

ここでは、全体として言語の機能の視角から言語認識を把握しようとする立場が顕著に現れてみるとみられるが、このように、言語認識にA・Bの二側面を設定することは、現時点においても必要で適切な処置であると考えている。

このような言語認識の二重性に深いかわりをもつ事象の一つとして、言語記号の他種のすべての記号への浸透性ということがあげられるであろう。この点に触れて、筆者は「言葉と感性」（『教育研究』平成4年7月号）の中で、次のように記述している。

……学校における授業の過程を構成する主要な記号的方法として、次の六項をあげることができる。

- ①身体的な動作・運動の実演と観察・鑑賞
- ②動植物・化学物質など実物の展示・操作・実験と観察・理解
- ③映像・模型など模擬の展示・操作・実験と観察・理解・鑑賞

④音楽・絵画など芸術的シンボルの構成・表現と理解・鑑賞

⑤数学記号・幾何学図形などの演算・論証と理解

⑥言語記号の音声的・文字的表现と理解・解釈・鑑賞

……言葉に直接かわりをもつ項は⑥であるが、バンヴェニストが言語体系を「すべての記号体系の解釈者」(interprétant de tous les systèmes sémiotiques)として規定しているように(É. Benveniste, problèmes de linguistique générale, 2, Gallimard, 1974, p. 229), その⑥の言語記号行動は他の①から⑤までの各記号行動に対して大きな浸透力を持ち特有の補助的機能を果たしている。……

このような言語記号(そしてそれにもとづく言語記号行動)の他種の記号(そしてそれにもとづく他種の記号行動)に対する浸透性は、いかなる基盤にもとづいて現象するのか追尋していくとき、そこに言語の媒介性、とりわけ、言語の機能的媒介性が浮かび上がってくることになる。これに関して筆者は、「言語の媒介性と国語教育との関連」(『日本語学』昭和62年4月号)の中で、次のように記述している。

……個人と個人との関係から個人と社会との関係へと人間的関係を広げていく方向における言語の機能的媒介性をその第一類とするならば、それとは方向を異にするその第二類とも言うべき機能的媒介性が見いだされる。それは、個人と個人との関係という人間的関係と同時に、さらにそのような人間と事物・事態との間をも媒介する方向における言語の機能的媒介性である。

カール・ビューラーの言語のオルガノン・モデルの図解の一つによれば、機関(Organum)としての言語記号〔中央〕は、「もの・こと」(die Dinge)〔中央の上〕と「ひと」(einer)〔左の下〕と「ひと」(der andere)〔右の下〕の、以上三角形の三つの頂点を結ぶ中間点に位置づけられている(K. Bühler, Sprachtheorie, Jena, 1934, s. 25)。すなわちそこで、言語は、個人と個人との間の中間者、媒介者として位置づけられているとともに、事物・事態と人間との間の中間者、媒介者としても位置づけられているのである。

言語は起源的に見ても、個人と個人との間、事物・事態と人間との間をそれぞれ相対的に位置づけそれらを結合する二重の媒介者として、人間が生活・文化の発展的必要上創造し、またそれ自体そのような対人的機能と対物的機能とを同時に果たすべきものとして生成してきたとみられる。

以上の記述の中で指摘されているような言語記号における二重の媒介者性、およびそれにもとづく対人的・対物的機能の二重性には、特に着目したい。そこには、言語記号に即しての対他的機能性把握の視点がみとめられる。そのような対他的機能性への視点に立つての対人的・対物的機能の二重性の把握と、言語認識におけるA・Bの二重性の把握の間には、どのような関連性が見いだされるであろうか。

2. 言語認識における対他的・対自的・即自的機能性把握の視点

まず、1の初めの部分において、主として言語の意味形式による生活世界のさまざまなことからの把握作用の側面を言語認識Aとして規定した。また、1の終わりの部分において、言語記号が個人と個人との間の媒介者として位置づけられるのみならず、そのような人間と事物・事態との間の媒介者としても位置づけられるという、言語記号のもつ二重の媒介者性が指摘された。

そこで、言語認識Aに際しての把握作用の対象「生活世界のさまざまなことから」には、言語記号の対物的機能にもとづく対象・事態の面のみならず、その対人的機能にもとづく人間の面も包含されるべきことが明らかにされたと言ってよいであろう。

次に、1の終わりの部分で指摘したように、言語記号における対人的・対物的の機能の二重性の把握に際しては、言語記号に即しての対他的機能性把握の視点が明確にみとめられる。そして、いまここで触れたように、そのような言語記号に即しての対他的機能性把握の視点はまた、言語認識Aの側面についても該当する基盤的性格のものであった。

これに対して、言語認識Bの側面については、言語記号に即しての対自的機能性把握の視点がみとめられると判断されるのである。そのような対自的機能性把握の視点にかかわる動態を、(機能的媒介性ととも言語の媒介性を二分する)作用的媒介性の地平に立って解析するとするならば、言語記号の展開をめぐっての内的過程と外的過程、主観的部面と客観的部面、形式面と内容面、現在点に媒介される過去と未来等のパターンがまず問題になってくるであろう。

さらに、1の初めの部分で、言語認識Aと言語認識Bとの段階的統合の重要性が指摘されているが、そのような言語認識における全体的統合性は、言語記号自体に即しての即自的機能性把握の視点に立って初めて達成されることになるであろう。また、言語作用、言語機能、そして人間の言語資質・能力にすべてかかわるものとして言語認識の構造的深さと内容的豊かさとは、この視点において初めて展望されることになるであろう。